

ステップアップフォーラム
第1部

生活を助ける商品

高齢化、危機管理、環境など、社会的課題解決型商品

IDS STEP UP FORUM
Part 1

NIIGATA DESIGN IDS COMPETITION 2017

コメンテーター

豊口 協

公立大学法人長岡造形大学 名誉教授
プロダクトデザイン

宮武 滋

株式会社東急ハンズ執行役員 MD企画部長
流通

大島 礼治

法政大学デザイン工学部 名誉教授
プロダクトデザイン

コーディネーター

畔上 正美

新潟県工業技術総合研究所 素材応用技術支援センター長

畔上 ただいまより、「ニイガタIDSデザインコンペティション2017」ステップアップフォーラムを開催いたします。このフォーラムは審査委員の先生方から作品の講評をいただいて、今後の商品開発のヒントを得ることを目的に開催するものでございます。午前のテーマは「生活を助ける商品」です。それでは、豊口先生からよろしくお願ひします。

豊口 おはようございます。総評のときに「デザインは世界の共通点」と申し上げたのですけれども、これは私の今までの人生の中で、いろいろ経験したことから申し上げています。と言いますのは、三十数歳のときに台湾にデザイン教育の学部を大学に作るからお前行ってこいという指示を受けまして、何が何だか分からなかったのですけれども、鞆一つで台北に行ったのです。今、あそこに大同大学という大学がありますけれども、そこに台湾で初めて台湾政府のバックアップを受けて、デザイン教育の学部を作るという。行ってみたら9人の先生の教育をしろと。それから、文部省に申請をする書類を全部お前作れと。そして、カリキュラムも全部作れと。期間は100日であると。こういう命令書を受けまして、それで100日間現場で全部やりました。朝8時から夜12時まで100日間ぶっ通しでやりました。

そのときに、実は私は北京語も分かりませんし、そのころは二一八も分からなかったのですけれども、共通の言葉がありました。それは、先ほど申し上げたデザインと言っている以前に音楽があったのです。歌で伝えたのです。日本の童謡で。それが通じるのです。だから世界の共

通言語の一つにはその土地の音楽、これは共通の一つのコミュニケーションツールとして非常に有効でした。

それから、もう一つは1日の生活のサイクルみたいなものですけれども、これがいろいろところで全部違うわけです。そのサイクルを一緒にするという調整をすることが一つのコミュニケーション。生活の仕方が以心伝心と言いますか、そういう形で伝わっていく。その中でデザイン教育の現場としての基礎を先生方一人一人に伝達したわけです。そのときにデザインというのは共通なのだなど。黙って言葉が分からなくてもモノを作る、そういう一つの作法というかしきたりというのは世界で共通に伝わっていくものだとということを痛感いたしました。それが私の「デザインは世界の共通言語である」ということを感じた最初の始まりなのです。そういう意味で、それ以降その言葉を使わせていただいておりますけれども、今、世界を見ますと、デザインという一つの要素をつぎ込んだモノとか、食べ物とか、今や世界の共通のものとして、伝わっていているという気がいたします。

今回も、生活を助けるということで三つのアイテムを選ばせていただきました。生活を助けるというのはどういうことか。まだ若い方には分からないでしょう。道具が生活を助ける。私くらいの年になると、なるほど道具というのは生活を助けてくれるとよく分かるのです。後期高齢者ですから自分の思うように体が動かない。そのときにやっぱり道具が助けてくれる。ここに、藤の家具があります。これは予防のための道具として開発をされておられる。ものすごく難しい世界に挑戦しておられる。高齢者の状況というのは100人いれば全部違います。年でも違

います。そういう人たちが使う道具というのは、これがまさにその道具であるという提案はできない。ただ、共通して高齢者が必要としているものの一つに腰を掛ける道具があります。ちょっと腰を降ろす。そういう少し腰を掛けるという動作が高齢者にとってはもっとも重要な一つの要素になっています。座ったときに、また立ち上がる。簡単に立ち上がれる。しかも座ったツールを別のところに持って行ってまたそれを使う。腰を掛けて作業する



ということは、年をとった人にとっては重要な一つの要素なのです。ですから軽くなくてははいけない。そういう意味で膝というのは非常に適切な素材なのです。ただし、こういうふうに使い方を限定して提案しますと、使い勝手の幅がものすごく狭くなる。こういう状態で使える人と使えない人が明確に分かれてきます。

高齢者を対象としてこの道具をこれからお作りになる場合には、相当の情報量を吸収して、その中から高齢者が必要とする道具をぜひ見付け出していただきたい。これは大変な作業だと思うのです。人間とはわがままですから、自分に少し合わないとすぐ文句言ったりしますが、若い人は道具に自分を合わせることができるのですけれども、年を取ると道具に合わせるということができなくなります。そういう貴重な経験を私は毎日体験しております。相当慎重に、しかも科学的にデータ分析をしないとなかなか高齢者に適用するようなものが

見付からない。ただ、共通の必要な要素というのは幾つかあるという気がします。

それから、ここにフライパンがあります。昔からフライパンというのは重いものだと思っていた。ところが、年を取ってくると重いフライパンというのは見ただけで使わなくなってくる。使えなくなってくる。握ったときに普通落とさないで頑張るのでだけれども、おそらく握力が減ってきた方は落とすケースがある。足に落としたりすると大変ですし、熱い物が入っていますと非常に大変なことになります。そういう意味で、高齢者になったときには、それから年を取った方たちの道具は、とにかく軽くないといけないという気がします。

このフライパンは重そうに見えますけれども、割合重量感としては適切です。フライパンで料理を作るのは、これはまた非常に作りやすいのです。何でも出来ます。私も24年間一人で生活していますが、フライパンほど使いやすい道具はないと思います。それがやはり、だんだん実は重くなってきている。それをいかに手頃に使うかということに関して、フライパンの機能を持った手頃な調理鍋といいますが道具というものが、高齢者にとっては必要になってくるのではないかと。お料理によって道具を分けるということは、若い方はいろいろ凝ってやりますけれども、高齢者になると万能な鍋が必要になってくるのです。一つで全て済ませてしまう。そういう生活の中から、ぜひ高齢者が使うようなこういう万能なツールというものを考えていただくと、非常にありがたいのです。これからの高齢者社会、だんだん高齢者が増えてまいりましたけれども、そういう人たちの生活というのはどうなっていくのか。これもぜひ研究をしていただきたいと思います。

それから、小千谷縮。これは肌触りがすごくいいのですよ。今、皆さん方も寝るときにはパジャマを着用されると思います。今、いろいろなパジャマが出ています。いろいろな生地で作ったパジャマも出ています。それぞれ人間が生活をしていく上で、1日の3分の1くらいは寝る時間になっています。それで3分の1の時間帯で着ている

着物といいますが洋服といいますが、着用するものというのはパジャマないしはそれに準ずるものなのですからけれども、いいものがなかなかないのです。

この小千谷の縮は新しい加工をしておりますからごわごわしていませんし、非常に肌触りがいいのです。この何でもないデザイン、実は寝るときに着用するものとしては一番重要です。いろいろなものがくっついていると、寝るときに着るものとしては不都合な気がします。後期高齢者の目から道具を選ぶポイントもこれからは重要だと思います。

畔上 先生のほうからはデザインは共通言語だということ、デザインはそれ自体がもうユニバーサルという話。それと、今後、高齢者視点でものをもう一度見ることがこれからのモノづくりの、また一つのヒントになると感じました。どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、宮武先生よろしくお願ひいたします。

宮武 おはようございます。私は株式会社東急ハンズの宮武と申します。今年でこの賞の審査員を務めさせていただいてから4年目になります。年を経るごとに、非常に精度の高いというか、いろいろな優れた製品が出てきて、私自身も非常に楽しみにしています。私は今、東急ハ



ンズで商品調達と全店の供給の責任者をしております。そういった意味では、ここ新潟県の方々には非常にお世話になっておまして、逆に私のほうからお礼を申し上げます。逆にお礼を申し上げます。

とかく最近では、コト消費とかコト発想とか言われるようになってきております。モノよりもコト。コトというのは、体験だとかそういうことだったと思うのですけれども、私自身はモノを売っている立場から言うと、体験とか経験というのは非常に貴重なものだと思いますけれども、それに基づくモノというものは、必ず生活の中に必要ではないかと思っております。

よくコト発想と言われますけれども、自分から「自らこれが困っている」とか、「自らこういうことやりたい」とかという、非常に積極的な思考をお持ちの方というのはそう多くはないと思っていて、ほとんどの方は何かをきっかけに人からのアドバイスだとか、あるいは人から勧められた、そういうようなものが起点になっていると思っています。

そういった意味では、私どものような店舗はモノを置いているのですが、モノと出会うことによって困っていた何かが分かるわけです。あと、自分がしたかったことはこういうことなのかというのが、モノとの出会いを通じて分かるということが非常に重要なかなと思っております。そういった場を提供することが、私どものような流通業にはもっとも必要なことだと思っております。また、昨今、非常にネット通販というようなものの市場がどんどん、どんどん大きくなってきているのですけれども、インターネットの世界にはモノとの幸せな出会い、偶発的な出会いというのがなかなかなくて、そういった偶発的な出会いというのが、わりと自分に大きな幸せをもたらしてくれるものがあるのではないかと感じたりもします。

そこで、やはりどういものが店頭にあったときに幸せな出会いにつながるのかということ、やはりモノの品質だとか完成度だとか、モノ自体が素晴らしいとかというのが、今までは比較的多かったと思うのです。今の店頭に来られているお客様というのは、やはりモノによって



自分が何かを成し得たいとか、いろいろな体験をしたいと思っていっちゃう。です。で、一目見て、あるいは店員から説明を聞いて、モノにまつわるバックグラウンドストーリーだとか、モノが自分にもたらししてくれる幸せな気持ちだとか、そういうようなことが想像できないモノが、どんどん淘汰されていくように感じています。

そういった観点からすると、私自身はやはりモノがもたらししてくれる幸せというのは大きく二つの方向があると思っています。一つは、今、マイナスなことをゼロに戻してくれるものと、今ゼロであったものをプラスに持ってきているものだと思います。それがまさしく今回のステップアップフォーラムの生活を助けるという観点と、生活を楽しむという観点だと思っています。

今回は生活を助けるというようなテーマでございまして、私なりに生活を助けると。いわばマイナスのものをゼロに戻してくれるというようなものをピックアップしてきました。

まず、一番目なのですが、いわゆる問題解決型の商品というのは二つ、今大きく出しているのですが、家庭の中の些細な問題もあれば、社会的な大きな問題

もあつたりします。ただ、それが一つの共通項がある場合もあつたりもします。

先ほど、私はネット通販の市場が年々倍々的に伸びているという話をさせていただきました。私のような小売業にとっては、非常に商売敵として困る存在なのですが、かく言う私自身も本だとかいろいろなものをネット通販で買つたりもします。

その中で二つ大きな問題があつて、一つがやはり不在配達の問題。これは今、新聞市場を賑やかしていますけれども、宅配最大手のところがかなり厳しい労働環境だということで、大きな社会問題になりつつあります。そのときにマンションであれば宅配ボックスのようなものがあるのですが、逆に一般戸建ての方はなかなかそういうものを用意できない。それで、今までは時間指定の配達でなるべくその時間帯にいるというところで、問題を解決してきたと思うのですが、今度は再配達の問題だとかいろいろな問題が出て来ていると。

これは私自身が大手ネット通販会社から本をよく買うのです。書店に行く時間もなかなかとれないと、欲しい本をネットで買つたりするのですが、たったこれくらいの

本なのに、ご丁寧に大きなダンボールで来たりするわけです。それで不在者通知とか入っていると、そんなのはポストに入れておいてくれればいいのにと思ふわけです。

それで、今後その社会的な問題を解決しようと思ったときに、ネット通販の中の流通業のかなりを占めるであろう例えば本のようなものは、基本的に郵送でポストの中に入れてみようというような流れになってきたときに、こちらに置いている大きなポストなのですが、こちらはいわゆる宅配のメール便が入る大きさになっています。そしてダイヤル錠でちゃんとセキュリティの対策もとられているというところ。こういうものが普及すると、生活者にとってみれば何回も不在通知の連絡をしなくてもいい。配送する立場からすれば1回行けば済むというところ。二つの大きな問題が解決できるのではなからうかと思いました。

もう一つの問題は、先ほども申しましたように、いろいろな本を買うと家の中にダンボールが溜まって困るのです。ダンボールというのは溜まるまでその辺に積み上げていくと非常に乱雑になりますし、一回一回紐で縛るにもある程度まとめて出さないとリサイクルに出にくいというところで、私自身非常に家の中でダンボールをどこに置いておくのかということに困った経験があります。意識して困っているというよりは、何となく片付かないなというような感じでした。そのときにたまたま今回、ダンボール片付けラックというものを見つけまして、これはダンボールを比較的目立たない場所に置けるようになっていて、それでちゃんと立てかけであり、なおかつそこで紐掛けもできる。紐を置くスペースもある。更に、下がキャスターになっているので、玄関先までゴロゴロ転がしていけるというところで、こういう非常に潜在的な家庭の中のちょっとした問題点を拾い上げて製品化するというのは、製品化にあたってはかなり思い切った決断もあつたと思うのですが、こういうものを形にできるというのはやはり非常に素晴らしいことだということに感じました。

それと、あともう一点なのですが、これは昨年のID

S大賞が赤い丸い輪っか型の立てかける消火用のものだったので。あれは非常にデザインも優れていて、すぐに取り出してすぐに投げて消火ができるというものだったように記憶しています。

ただ、普通の一般家庭の消火剤というのは、基本的に火が出たときにそれを発見して消火活動をしないと火が消えないというようなものだと思います。このスタンド型自動消火装置ですが、これは優れているなと思ったのは、家庭の火元のほぼ9割以上はガスコンロ回り。これはガスコンロのところに置いておくと、そこで火元が出て異常に高温になったりすると、その熱を感知してタンクに溜まっている消火剤が上から噴霧されて、その火を安全に小さくして消せるようにするというものなのです。こんな大がかりのものと言われるかもしれないのですが、ほとんど火の掛けっぱなしの事故というのは、例えば火を掛けたまま煮物をして少し寝てしまふだとか、違うことをして忘れてしまふだとか、意外と誰にでも起こり得ることだと言われています。そういうようなもので、その火が出たことに気が付くことなく勝手にこれがやってくれるわけです。

そういう意味では今後の高齢社会になってますますそういうニーズが上がってくると思いますので、また今年異常に火事のニュース多いなと思っています。そういったことから、こういうものがやはり製品として世に出ると、個人あるいは社会の大きな問題を解決できるのではなからうかとお話させていただきました。私から以上でございます。

畔上 はじめにモノと出会うことで足りないことが分かるということをおっしゃったのですが、確かに会場に来るとそれを実感するのです。ありがとうございます。

それでは、大島先生よろしくお願いたします。

大島 私は、久しぶりにこの審査に参加いたしました。以前はたしか8年前くらいだったか。その頃と比べて本

STEP UP FORUM Part 1 生活を助ける商品

当にいい製品(作品)を出されるようになったなと思って
おります。製品もそうですが、特に立て掛けている説明
パネル等が非常に分かりやすく表現されているのに驚
きました。そのような意味も含めてだいぶ進歩してい
るなと思いました。

講評の前に私の話を少しいたしますと、以前は多摩
美術大学といういわゆる美大というところにいました、
そこで学生を指導していたのですが、当時の学生はデザ

もあり、いろいろなものが係わってくる。そこに初めて形
というものが生まれてくる。いわば一通貫的な意味で
システムデザイン学科と名前を付けたのですが、多くの
人が勘違いして、いわゆるIT系のシステムと思われた
のが、唯一間違えたネーミングです。しかしながら、いつ
の間にかシステムデザインが一般化してしまいましたの
で、今はこれでいいのかなという気持ちであります。

今日は、なるべく多くの講評をして欲しいとの話があ
りましたので、5点の作品に対して講評をさせていただきます。一点目は、ワイエムケーさんの藤のベッドです。実は
私の奥さんの母が脳梗塞で倒れまして、一時家庭で見て
おりました。そのときは想像以上に大変でした。何が
一番大変かと言えば、ベッドから移動して食事やトイレを
させる労力です。それとは別に表現が適切ではないかも
知れませんが、だんだん部屋の中が匂ってくるのです。頻
繁に換気をやっても寝具はなかなか変えられませんし、
いわばベッドそのものが匂ってくるのです。これは在宅介
護をする場合、大変な問題と考えていたところ、会場で
あのベッドを見たときに、通気性は非常にいいですし、畳
の上で生活をしている場合は移動も楽だと感じました。
多分、製作している会社側以上に市場の方は在宅介護な
ど、いろいろなシーンで評価されるかと思います。まだま
だ製品としては完成形ではないと思います。余計なお世
話ですが少しアドバイスしますと、脇に置いてあったチェ
ストとはベッドとはデザイン的にも大きくかけ離れており
ますので、別個のアイテムとして扱われた方がよいのだ
ろうと思いました。ベッドそのものは低く設計されてお
りますが、必ずしも低いほうが良いという場合だけでも
ないので、その辺は少し考慮される必要があると思いま
す。特に畳に対して刺激を与えないように足の部分は丸
くしてあります。これはちょっとした配慮ですけれども、
良く考えられているデザインと評価しております。

二つ目は、システムスクエアさんの錠剤検知機です
が、この会社はもともとと食品などの異物混入検知器の
市場では、かなりのシェアを握っている会社ですけれど
も、いよいよ医療分野に進出して来たなと注目しており



ます。

8年前くらいに審査のときにも出てきましたが、正直
言いまして加工技術は良くなかったと記憶しています。
ところが今回の出品製品を見たらものすごく完成度が
上がっている。わずか数年で、これだけ良くなるのだなと
感じしております。先ほど開発担当の方と話をしてお
りましたら、やはり賞を獲るとその評価が開発部門の自信
となって、それを販売すると販売先の企業から良い評価
が戻ってくるから営業も嬉しい。営業は会社に戻ってそ
の報告をすれば、設計部門も頑張ればそれだけの解答
が得られるとなり、その結果、開発部門もやりやすくなる
といった、非常にいい循環が生まれていると先ほど報告
を受けました。本当に嬉しくなりました。そういう効果
がこのコンペティションにはあり、27回も続いている要因
なのだと思います。

現在、別口で勉強会をやっているのですが、未来社会
がどうなっていくのかと言うことを真剣に各部門の専門
家を交えて研究しております。その予測の中で、どうして
も無視できないのがAIです。現在、AIの技術は我々の
知らない世界でもものすごく進んでいます。その中で一番

大きく変化するのが流通と医療の現場だと私どもは推
測しております。おそらく医療の現場は患者に適した薬
を処方するオーダーメイド医療が進みますから、そのと
き大きく係わってくるのがAIです。当然未来の工場には
人がいないのです。今までの大規模な工場ではなくて、
データに基づいて必要量を生産する小規模な工場とな
ります。そして工場には人は全くなくなり、生産から流
通まで全てのコントロールをAIがしていく。その環境
で錠剤検知機は設置されていく、いい市場を狙ってきた
なと思っていますので、大変期待しております。

隣にハンズさんがいて言いにくいのですが、流通も大
きく変わります。店舗はショールーム的に扱われて、購買
者はそこに行って確かめる。モノを確認できれば実際は
インターネットで買うか、または、その実店舗が自前の
ネット販売に誘導していくのが、ここ数年後の姿と思わ
れます。しかし、AI技術が進歩してきますと、いつの間
にか自分がつぶやいた言葉に、「もしかしたらこういうも
のが今、必要ではありませんか?」と誘導される時代にな
ります。それは思っているよりも早くやってきます。

ここで話す必要はないかと思われるかもしれませんが、アマゾンで



Commentator

審査委員

法政大学デザイン工学部システムデザイン学科
名誉教授

インというとな真っ先にスケッチを描き始めるのです。ス
ケッチを書いていくうちに何となくこれが良いかなと根
拠のない妥協点を見つけていくのです。創作行為という
意味では手は動くのですが、その形態はどういう根拠が
あって選んだのかと言えば、どうしても外装優先(かっこ
いいカタチ)となるのです。このまま、このようなデザ
イナーを世の中に輩出して続け、本当にいいものかと思
い悩んでいたところ、十四、五年前に法政大学のほうからシ
ステムデザインという学科の立ち上げの話があり、参画
することになりました。それは、モノを感覚だけで作るの
ではなく、あらゆる視点から検証を加えることで根拠あ
るデザインが生まれるというものです。

そして、今回のコンペテーマにもありますが、社会の中
にはいろいろな問題が内在しています。それをデザイン
する側がきちんと観察しながら分析をして、どのような
問題解決ができるのか。そこには素材もあり、加工技術

Alexaというソフトが出ています。この会場でAlexaをご存じの方いらっしゃいますか？。昨年、アメリカで実験的に市場導入がされているのですが、今後Alexaが浸透してくるとタブレットが要らなくなると言われています。自分のちょっとしたつづやきを捨て、もしかしたら「〇〇さん今こういうものが必要ではないですか？」と、それならば「これとこれが良いですよ」と、売れ筋1位、2位の商品を紹介してしまうのです。人は、「これが今一番支持されていますよ」と返答が来ると誘導されてしまいますよね。じゃあ「それが欲しい」「分かりました」「それでは明日何時にお届けします」。これがちょうど缶ビールのサイズくらいの音声認識機で、既にアメリカで導入しているのです。第2ステップはこれに映像機能を加え、目の前の壁面に投影したり、いろいろな機器と連動することで、少し指で触れれば裏側も確認できる。そういう未来の市場にアマゾンが莫大な開発費を投資しているのです。

このような未来の姿が良いか悪いかは別にして、確実に変化はやってきます。その時に、商品というものがどう扱われていくのかというのが非常に難しい。特に良いものさえ作っていけば分かってもらえると言う時代ではなく、未来の変化に真摯に向き合っていくか、と乗遅れてしまう時代だと感じております。

残り、私が面白いと思った製品を3点紹介したいと思います。

この製品は、立食パーティーなどで使用されるトレーに使われるものです。この紙皿に挟み込むだけなのですが、挟むタイプのモノは結構いろいろあります。この時、困るのはタレの扱いです。話をしている間に垂れてしまって、洋服を汚してしまったりしますね。皆さんも一度は経験があるかと思います。挟み込むだけで自分の好きな味のタレを取り分け出来る、これは非常に便利だと思いました。また、飲みかけのビールなどで両手が塞がってしまいますがこの凹みにセットすれば食べることもできます。このように人間行動の観察から生まれたモノは根拠のある形になっております。

これは些細な解決かもしれませんが、生活を変えてくれるなどと思っています。当然のことながら、この素材や製造工程も含めて考えられているかと思いますが、これで作られた会社の方は会場におられるの分かりませんが、知的財産は取られているのでしょうか。ここは事前に確保しておいたほうが良いと思います。放っておくと来年の今頃には百均で並んでいますから、それをどうやってプロテクトするかと言うのはとても重要なことだと思っています。

次に、大賞を取った「ふくら」です。これは審査委員全員が納得した出品製品です。少し悔しいほどグラフィックデザインが良いのです。なかなかの完成度と評価しました。この和紙の膨らみ形状とグラフィックが調和しており、必要以上に華飾されていないと言うことが、好感を呼ぶデザインとなっています。緩やかな日本文化を表現した素晴らしい製品だと思っております。

まだ、開発途上だということを知っていますが、この裏側の処理は本当にどうするか悩ましいところだと思います。今までのポチ袋と違い、立体のものを入れられるポチ袋ですから、旦那さんから普通の感謝の気持ちとして、イヤリングを入れてプレゼントするなど使い方は未知数の感じがします。この裏面の処理が未熟かなと思っておりますので、メッセージスペースとして処理するなど、いろいろアイデアが出てくるかと思っております。可能性は十分にありますので期待しております。

最後に、これは私以外の審査員も講評すると思われ



ますが「SILOK」というシルクのめがね拭きとして商品化された製品です。この織物は非常に高価で伝統的な素晴らしいものと理解するのですが、この織物を見ていて悩んだのは、高級故の商品展開の難しさです。原価が高ければ小さくして付加価値を高める、確かにめがね拭きはあるかもしれませんが、でもどうせ商品化するならば普通サイズのめがね拭きではなく、この素材の特性を活かした新しいめがね拭きの提案までいかないと、世の中にあるめがね拭きと同じ扱いになってしまう気がします。例えば、これだけ張りのある織りですから、この特性を使ってめがねケースと一体化するとか、新たなめがね拭きのカタチを模索するなどを一歩踏み出して考える必要があると思います。

私はたまに着物を着るのですが、女性の和装品に比べ男物の和装品は数がありません。本当に何も無いのです。結局は印伝の袋を持つしかありません。このような狭い市場かも知れませんが、限られた人に高級な品を届けるのも選択肢の一つかも知れません。今後の商品展開に期待したいと思っております。ぜひ頑張ってください。

私からの講評は以上となります。

畔上 質問ないでしょうか。

北川 苜神工房、北川と申します。本来の質問とは関係ないかもしれませんが、私は苜のドライシートを今回出展させていただきました。残念ながら賞には選ばれませんでしたけれども、私自身としては、今まで苜というのはそれぞれの専門として取り扱う造園業がメインの需要家であったと思います。これを一般の需要家向けに手軽に取り扱えるという形状でドライシートというのを作ってみました。この商品価値というのですか、販売価値みたいなものを、もしでしたら審査員の先生目から見てどのように映ったか一言ずつでも教えていただければと。

畔上 たしかあれは価格が付いてありました。設定して



ありましたよね。少し相場とか教えていただけますか。

北川 今のところ公的にどこかの商店とか流通で販売しているわけではなくて、インターネット上で価格を提示して売っているというだけなのですが、展示しているA4サイズで大体2,000円。

畔上 小さいものは、おいくらですか。

北川 それの4分の1ですから大体。あの小さいものは実際には売っていません。フルサイズとしてはA4サイズが今メインなのです。

畔上 今、けっこうブームに苜はなっているように思うのですけれども。

北川 そうですね。ブームになっているかどうかは端的に言うのは難しいけれども。

畔上 分かりました。豊口先生いかがですか。

豊口 私は庭仕事をあまりやっていないものですから、私の視点から見るとよく分からない。はっきり言って申し上げられないのですけれども、盆栽に凝っている方は

STEP UP FORUM Part 1 生活を助ける商品

熱中してやっていらっやいます。そういう人たちはあの苔を基本的な材料としてお使いになっているのだろうと思うのです。苔がないと盆栽が成り立たないような状態になっていますから。ただ、そういう趣味性の非常に高い商品に、どのくらいのニーズを持った方がいらっやするのか、マーケットがあるのか。この辺が鍵だと思われる。そういう人たちがいらっやるといことは確かだと思います。特に都会の生活などでは、盆栽を家の中で楽しんでいらっやる方はたくさんいらっやると思うのです。そこら辺をどういうふうに関拓をしていられるのか。これから新しいマーケットを見付けていられることが一番大きな課題ではないかなと思います。

畔上 では、東急ハンズさん。宮武先生お願いします。

宮武 私は製品を見て直感的に感じたことなのですが、趣味性のほうに振るのか、関連性のほうに振るのか、少し難しいなと。振り方が難しいなと正直思いました。苔がブームなのですが、例えば盆栽だとか、あとは庭で育てるといふふうにごく趣味性を求められる方ももちろんいらっやるし、その苔を素材として使って、例えばアクセサリーホルダーだとか、あるいは表札で使ってもらって付けられるという方なのですけども、後者の方は、こういう言い方をすると適切かどうか分からないのですけれども、けっこう百円ショップとかでもドライ苔を使っているのです。それで関連性のほうを求めると、本当にそこまできてしまいます。あちらのプロダクトに関して言えば、ドライ苔は本格的なものだと思いますし、なおかつ、土を使わないので、海外の検疫とかにひっかからないという特徴を持っているというところで、本格的なのだけれども簡便性が高いというものと、あとその価格ですね。どういう形で折り合いを付けて、どんな方をターゲットにするのかというのが、今一つ私からすると、その解が見付けられなかったということが正直なところなんです。

畔上 ありがとうございます。大島先生、お願いします。

大島 先生方が言われたように、私も製品の狙いが分からないと感じました。ドライ苔をどれほど大きくできるのか、大きくできるならば建築資材として開発する手法もあるのですが、その場合、量産的に可能かどうかです。逆に小さくハガキサイズにして、ハガキとして活路を見つけるかです。要するに失礼かもしれませんが、A4サイズにできましたということが先にあって、できてからどうしようと言うプロセスになっていると感じられます。本当は先にこういう市場でこのような問題や要望がある、その問題解決として、ドライ苔が有効なので開発したと言うプロセスが必要です。今後、商品展開をしていく過程において、いろいろな障壁が現れるかもしれませんが、一步一步乗り越えて進んでいくしかないと思います。発想的にはA4にこだわらず、サイズを変えることで見えてくる市場があるかと思しますので、一度試す価値はあると思います。期待しております。

畔上 いかがですか。ありがとうございます。ほかにご質問は。

高井 川口工器株式会社の高井と申します。話の中で高齢者向けの商品、主に介護関係の話が出て来たかと思うのですけれども、私の母もけっこう高齢者の立場になってきたので、力が無くなってきたので、そういった方向に介護まではいかないけれども、力添えするような商品を開発していけないかなと考えてはいたのですが、その際に見た目的にこだわる方向として、まず決して介護用品には見えないような、日常生活に一体化しながらも力を添える方向に進むほうが良いと考えるか、それとも、見た目から少し無骨だけれども、使用上に安心して使えるような、安心感を与えられるような太い素材で作ったりとか、そちらの方向に進んだほうが良いのかとご意見はいただけますか。商品開発としては美しさを求



めるか、ぱっと見の安全性を、安心感を与えるほうを目指したほうがいいのか。

豊口 良いものというのは美しいですね。無骨なものにはよくないです。だから、いくら高齢者が使うにしても、やっぱりそれはその目的とした形をちゃんと整えていて、しかも美しく使うのが楽しくなる。これが大条件ではないかと思えます。いかに安全であっても、お婆あちゃんが使っているから嫌だと子どもたちが、孫が思うようなものは困る。やっぱり孫たちもそれを使ってみたくと思うような、そういうものが私は一番いいのではないかと思います。以上です。

宮武 少し介護用品から離れるのですけれども、今、例えばワイングラスでも、屋外で使うようなプラスチック製品あるいはシリコンで作られたようなものがあるのですけれども、一見してみると本当にガラスのような透明感があつたりするのです。非常に美しいものなのです。やはり屋外で飲むのだからこのプラスチックでいいやと思えた瞬間に、多分お客様に手に取ってもらえないのです。手に取ってみたらこれはプラスチックなのだというようなものが比較的好まれるという傾向はもちろんあります。これは豊口委員長とも全く同じ意見なのですが、そこに何らかの驚きがないと、いくら介護用のものだとしても、なかなか昨今、受け入れられるのも厳しいかなという印象でございませう。

大島 私は介護と言う程の経験はしておりませんが、その少ない経験から話せば、やはり介護する側、される側の視点はまったく異なるように感じます。介護する側というのは大変です。想像以上に体力も要りますし、決してきれい事ではありません。必要充分条件として介護に必要なところには必要なものが付いてきます。ただ、それを足して行くだけではなく、機能を突き詰めて整理していくと、最後は自然にきれいなモノになっていきます。必要だからと言って無骨のまま満足していると使いやすいものには決してなりません。要素を足していくのではなくて削いでいく。そうすることで、先ほど豊口先生が指摘した美しいものに自然と近づきますから、その追及を怠らなければうまくいくと思います。

畔上 ちょうどこれで時間になりました。先生方にぜひ拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

